日本医史学雑誌第四十四巻第四号　平成十年三月　二十日受付
平成十年十二月二十日発行　平成十年九月二十一日受理

巻子写本から宋元版へ——中世日本における中国医書受容の様相

小曽戸　洋

緒　言

『医心方』成立（九八四）から一世紀以上が経過したというのに、その間、医学研究は低迷に陥り、新しい医書の編纂著述活動は一切なされなかった。それは唐医学の集約である『医心方』の完成度があまりにも高く、それを凌ぐ必要性もすべも全くといってよいほどなかったからである。十一世紀の医学進歩の沈滞は、一五〇〇年にわたる日本医学文化史上、最低の時期であった。大きな要因は、唐末・五代から北宋初にかけての中国医学文化の荒廃にある。

この状況を打破し、新風を吹き込んだのは、宋における医薬書出版文化の開花にほかならない。日本の医学文化はこれを享受することによって再び活性化し、鎌倉時代における新たな医学文化興隆を生むこととなった。その過程は換言すれば「（唐鈔本に基づく）巻子写本から宋元版へ」ということになる。近世までの日本伝統医学文化の創作は、そのほとんどが中国由来の医薬書を道具としてなされたといっても過言ではない。本論では中世日本において、いかなる経緯でその道具を導入し、日本伝統医学文化を築いていったかのあらすじを考究する。

一、宋の医書出版

印刷の起源と発展

紀元以前、中国では甲骨から金石、そして木竹簡や帛を素材に文字（書）が記されていたが、西暦一〇五年に蔡倫が紙を発明し（実は一世紀後半に始まるらしい）、今日の紙主体の文字文明へと至った。

日本への漢字伝来はむろん金石文字が初めであるが、五～六世紀、書物といえるものの伝来は、中国のように木竹簡や帛書の時期を経ることなく、一挙に紙に墨をもって記された巻子写本の形態にて行われたようである。これは長い青銅器時代を経ることなく一気に稲作・鉄器併用の弥生文化が渡来したのと似ている。日本古代における木簡の用途は書物の素材とはいいがたい。大宝律令（七〇一）医疾令に指定された医学教科書が紙製の巻子写本の形態で渡来し、和製紙（和紙）に転写され用いられたことはいうまでもない。

印刷の起源は印章の押捺であるとか、金石の拓本であるとかいわれる。中国では早くから典籍の標準テキストを公示するために、政府の文教機関にその石刻碑が建立され、複写を撮るために拓本技法が開発された。これも紙が存在してこその技術であり、表裏・陰刻陽刻逆転の差こそあれ、広義には印刷の範疇に属するものである。

いわゆる印刷品の現存最古の遺品は、日本法隆寺の百万塔陀羅尼（七六四）であるが、これは書物というほどのものではなく、さすれば敦煌本の『金剛般若波羅蜜経』（八六八）が唐代有刊記最古本である。ともあれ書物（典籍）の印刷は唐代（中唐以降）に始まった。日本では平安時代前期に相当する。

五代を経て宋代に入ると印刷技法そして出版流通機構は飛躍的に進展した。すなわち中央・地方において、官刻本・坊刻本（家刻本）がさかんに印刷出版されたのである。

北宋の医書出版

五代以前に医学書が印刷出版された事実があるか否かについては遺存品がないので確かではないが、唐代（九世紀）長安では小規模なことは行われたようである。[1]

とはいえ医書出版が国家的規模で行われるようになるのは北宋時代（九六〇～一一二七）に入ってからのことである。

『開宝新詳定本草』二〇巻（九七三）

建国間もない開宝六年（九七三）、『開宝新詳定本草』が国子監にて刊行された。北宋初の印刷医書が本草書であったことは注目に値する。薬材の供給と鑑別選定が医療の基本的作業と認識されたためであろう。いくら医方書が普及しても、薬材の供給と真贋がないがしろではじまらないからである。[2]本書刊行の事実は「補注所引書伝」（『証類本草』引）に「……翰林学士盧多遜等刊定凡二十巻、御製序、鏤板于国子監」とあることによってうかがえる。

『開宝重定本草』二〇巻目録一巻（九七四）

「開宝重定序」（『証類本草』引）に「……采衆議、定為印板、乃以白字為神農所説、墨字為名医所伝」とあることによって版行されたことがうかがえる。これは『開宝新詳定本草』の翌年、開宝七年（九七四）のことで、『新詳定』の校定が不充分だったためだとされるが、それにしても二〇巻に及ぶ書の校訂版を翌年刊行するとは、いささか理解しにくくも思われる。よほど本草書完成への熱意が高かったか、あるいは両書連年刊行の事実に疑問を挟むべきか。

『太平聖恵方』一〇〇巻（九九二）

本書は宋の太宗が王懐隠ら四名に命じて編纂させた一〇〇巻（一六七〇門、一六八三四処方）からなる医方集で、このような厖大な書が十世紀に彫版に付せられたことは驚かされる。しかし太宗御製序にみえる太宗の医療に対する興味の高さ、そして当時全国各地で厖大な仏典が版刻されていた実態を考えれば納得もいこう。出版年は淳化三年（九九二）のこ

とらしく（『直斎書録解題』および『玉海』巻六十三）、太宗御製序に「今編勒成一百巻、命曰太平聖恵方、仍令彫刻印版、徧施華夷、凡爾生霊、宜知朕意」とあるから、刊行されたことは事実であろう。

『黄帝内経素問』『難経』『巣氏病源候論』（一〇二七）

『玉海』によると天聖四年（一〇二六）十月十二日に（仁宗の）命によって晁宗愨・王挙正が『黄帝内経素問』『難経』『巣氏病源候論』[3]を校定し、翌五年四月、国子監をして摸印版行せしめ、詔によって学士の宋綬の序が書いたという。現伝本の『諸病源候論』にはこのときの宋綬の序が付いており、現伝本は当該時の版本に基づくものであることがわかる。[4]

『銅人腧穴針灸図経』三巻（一〇二七）

『玉海』（天聖針経の項）によると、天聖五年（一〇二七）、尚薬奉御の王惟一は勅を奉じ、従来混乱のあった経穴・経絡の統一をはかるため、標準人体模型二体を鋳造し、さらに標準テキストたる『銅人腧針灸図経』三巻を模印頒行した。同七年閏二月には諸州に賜与された。

『（慶暦）善救方』（未刊）

『玉海』（慶暦善救方の項）に「慶暦八年二月癸酉、以南方病毒者乏方薬、為頒善救方、又嘗出通天犀、命太医和薬賜疫者」とあることから、[5]『（慶暦）善救方』なる書が慶暦八年（一〇四八）に刊行されたと解するむきもある。[6]しかし史料の記載には「頒行」とあるのみで「摸印」「鏤版」などとはいっていない。「頒行」とは文字どおり広く一般に布き行うことであって、印刷出版と即断するいわれはない。本書の場合は石碑に刻して公示し、転写を奨励したのである。『（慶暦）善救方』の皇祐元年（一〇四九）二月二十八日付の後序に「謹以刻石、樹之県門外左、令観趁者自得、而不求有司云」（『臨川先生文集』[7]）とあるのが明証である。

『（皇祐）簡要済衆方』五巻（一〇五一）

『玉海』（皇祐簡要済衆方の項）に「皇祐三年集簡要済衆方五巻頒行、標脈証、叙病源、去諸家浮冗」とある。[8]この場合

には版行されたらしい。後年書かれた本書の蘇軾跋に「……於是詔太医集名方、曰簡要済衆、凡五巻三冊、鏤板模印、以賜郡県」（『東坡全集』）[9]とあることからそれがわかる。しかし陳捷氏[10]が指摘しているように、当時版刻本の流通普及はスムーズではなく、本書は木製看板に墨書され、転写されて流布したようである。蘇軾の跋に続けて「俾人得伝録、用広極療、意欲錫以康寧之福、躋之仁寿之域、已而県与律令同蔵、殆愈一紀、窮達之民、莫或聞知、聖沢壅而不宣、吏之罪也、乃書以方版、揭之通会、不独流伝民間、痊痾愈疾、亦欲使人知上恩也、後之君子、儻不以為誚、歳一検挙之、使無遺毀焉」とあることによってその状況がうかがえる。

『嘉祐補注本草』二〇巻目録一巻（一〇六二）『図経本草』二〇巻（一〇六二）

従来、医書の校訂・刊行は教育行政官庁である国子監で行われたが、嘉祐二年（一〇五七）、編集院に医書専門の校正医書局が設置され、まずは先の『開宝本草』の改訂作業に着手。掌禹錫・林億・張洞・蘇頌、ついで秦宗古・朱有章・陳検・高保衡らが順次加わり、嘉祐六年（一〇六一）、『嘉祐補注（神農）本草』と題して繕写、彫版に付された。同年『図経本草』の編纂も成り、翌七年（一〇六二）、進呈・刊行された。

以後、高保衡・孫奇・林億らによる治平・熙寧の大規模な医学典籍の校刊事業はこの校正医書局にて行われた。

『傷寒論』一〇巻（一〇六五）

治平二年（一〇六五）から熙寧二年（一〇六九）の五年間のうちに最も主だった医学典籍九書一六七巻がたて続けに校刊された。これらのうちに現存するものは一片たりともないが、現伝流布本はことごとくこの北宋校刊本を祖本とするものである。北宋校刊が行われなかったとしたら、残り得た医学典籍は僅々たるものであったろう。治平熙寧の医書校刊こそ以後の中国（東アジア）伝統医学の流れを決定づける一大事業だったのである。このことを念頭に置くことなしに中国伝統医学を語ることはできない。

その真っ先の対象となり、校刊されたのが漢の張仲景の著に由来するとされる『傷寒論』一〇巻であった。[11]進呈の年

月日は治平二年二月四日となっている。

『金匱玉函経』八巻（一〇六六）

続いて校刊されたのが『傷寒論』と伝来上の異本関係にある『金匱玉函経』八巻である。[12] 校正疏の年月日は治平三年正月十八日となっている。

『金匱要略方論』三巻（一〇六六か）

本書は旧伝の張仲景方の節略本に拠り、林億らが、先の二書と重複する傷寒の部を削り、再編集して刊行したものである。[13] 現伝本に進呈箚子が欠けているので進呈の正確な年月日は不明であるが、高・孫・林の官職名からしても、また『金匱玉函経』に次ぎ、『備急千金要方』に先んじたであろうことから考えても、治平三年の春頃の校刊と推定される。

『備急千金要方』三〇巻（一〇六六）

本書は唐の孫思邈の著になる医方書（医学全書）[14]。原題は『千金方』であるが、校刊に際し『備急千金要方』の書名が採用された。高・孫・林らの後序には治平三年正月二十五日に進呈を訖り、四月二十六日に至って聖旨を奉じ、鏤版施行したとある。これを版下完成から印刷完了と見なせば、その間わずか三ヶ月。いま大ざっぱに見積ると、全一〇八四葉を九〇日で割ると約一二葉。一人一日一葉を彫刻したとして、連日作業しても少なくとも一二人の刻工が働いたであろう。休みを考えれば一五人程度であろうか。顧従徳本『素問』では三八名の刻工（南宋初）が仕事をしているから、これは多いとはいえないだろう（『太平御覧』では一五〇人の刻工が従事している）。とすればごく丼勘定で見積ると一巻あたり三日程度で当時の刻版作業は進んだことになる。むろん印刷・製本には別の職人がほぼ同時に作業を行ったに違いない。これを考えれば『傷寒論』は葉数から推して、進呈から鏤板施行まで、わずか二〇日（一ヶ月弱）で済むことになる。日本の江戸時代の医書印刷よりも格段にペースが早い。宋政府の印刷規模の大きさをうかがわせる。

『千金翼方』三〇巻（一〇六七頃）

本書は孫思邈が『千金方』を扶翼する目的で後年著したとされる医方書（医学全書）[15]。本書の現伝本（元刻本）の宋臣校正表には進呈・鏤板の年月日が欠けていて詳細不明である。しかし、そこに付された高・孫・林の官職名からしても、校正表の口吻からしても、当然『千金方』に続いて校刊作業がなされたことは想像に難くない。『千金方』が一〇六六年、次掲の『脈経』が一〇六八年の校刊であるから、いまその中を採って一〇六七（治平四）年頃の刊と査定しておく。

『脈経』一〇巻（一〇六八）

本書は晋の王叔和の編になる脈を中心とした診断学書[16]。『素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』『金匱玉函経』『金匱要略』と重複する部分も多い。熙寧元年（一〇六八）七月十六日に進呈し、ただちに聖旨を奉じ鏤版施行に及んだことが本書末尾の表によって知られる。あるいは功成ったのは続く王安石らの列銜表からして熙寧二年七月十四日のことか。

『黄帝三部針灸甲乙経』一二巻（一〇六九）

本書は晋の皇甫謐の編になる針灸学書で、『素問』『霊枢』『明堂』を再編成したもの。本書末尾の表により、熙寧二年（一〇六八）四月二十三日に進呈し、ただちに聖旨を奉じ鏤版施行に付されたことがわかる。功成ったのは続く王安石らの列銜表からして同年五月二日のことか。

『外台秘要方』四〇巻（一〇六九）

本書は唐の王燾の編になる医方書（医学全書）[17]。この書は末尾に付される進呈表によると次のような校刊経緯が知られる。皇祐三年（一〇五一）五月二十六日の勅令によって秘閣所蔵の伝写本二・三本が国子監に送られ、孫兆が校勘を担当。治平二年（一〇六五）二月二日付発令の校正医書中に『外台秘要方』が指定されていたので孫兆校正本に基づき繕写を開始。版下が完成して聖旨を奉じ施行を申請すべく治平四年三月某日に進呈し訖り、熙寧二年五月二日、聖旨を奉じて鏤版施行した。『外台秘要方』は宋改医書中、最大の量を有する書であるが、それにしても進呈から鏤版施行までに二年余りの歳月を要しているのは、その間に『脈経』と『黄帝三部針灸甲乙経』（あるいは『重広補注黄帝内経素問』もか）の刻版

工程が割り込んだからではなかろうかと考えられる。

『重広補注黄帝内経素問』二四巻（一〇六九頃）

本書の原典は漢代の成立になると考えられる医経『（黄帝）（内経）素問』九巻で、宋斉の全元起注、唐の王冰注を経て北宋に伝えられた。[18] すでに天聖五年に刊行されたらしいことは前述のとおりであるが、校正医書局においても改訂再版された。これが現伝本の祖本である。孫兆の重訂によったものであるが、現伝の宋臣序には進呈・鏤版施行の年月日が脱落している。しかし例によって高・孫（奇）・林の官職名は『脈経』『黄帝三部針灸甲乙経』と同じであるから、こういった状況を考えれば進呈・鏤版施行期は必ずや熙寧に入ってからのことと察せられる。[19] 本書における宋臣の校注は「新校正云……」として詳細に記されており、その校注ぶりは他の宋改医書とは比較にならぬほど精緻である。松木氏は「特に新校正の校訂は（『千金方』『脈経』『甲乙経』の校正と）ほぼ同時に進行しながら『素問』に集約させていったと考えられる。この意味でも、『素問』の刊行は最終でなければならないであろう」としているが、筆者も同感である。[20] 林億らによる治平熙寧の医書校刊は『傷寒論』で華々しく幕を開け、『黄帝内経素問』によって見事なフィナーレを飾ったのである。いかにも校正医書局の面目躍如たる演出というべきではないか。

『（黄帝）針経』（一〇九三）

本書は現伝『黄帝内経霊枢』の祖本である。北宋政府の秘閣に『針経』の完本は存在しなかった。[21] さもなくば治平熙寧の校刊医書に採用されていたであろう。『黄帝内経』は『素問』と『針経』から成るというのが晋の皇甫謐以来の定説だからである。北宋政府は以後、高麗に本国で亡失した典籍が意外にも多く遺存していることに気付き、高麗宣宗八年（一〇九一）に佚書の献上を求めた。[22] その一つに「黄帝針経九巻」がある。これに応じ『針経』は翌元祐七年（一〇九二）に高麗から中国に送られ、[23] 翌同八年（一〇九三）に刊行された。[24] この元祐八年刊本『黄帝内経霊枢』の書名は『針経』で、同書が紹興二十五年（一一五五）の史崧校刊本『黄帝内経霊枢』の底本となり、今日に至ったらしい。[25]

以上が北宋代における医学典籍校刊の概要である。とくに治平熙寧の版本は後世の典範たるべく堂々たる大字版で作られたらしく、一般に広く流布するという性質のものではなかった。そこで後には普及本として小字本も刊行されたようである。『傷寒論』は元祐三年（一〇八八）の、また『脈経』には紹聖三年（一〇九六）の国子監小字本が刊行された記録がある。さらに『太平聖恵方』『諸病源候論』『備急千金要方』『外台秘要方』『脈経』『重広補注黄帝内経素問』などは南宋に入ってからも覆刊された事実が判明しており、治平熙寧の初刊以降、中央や地方でこれら医学典範の官刻・私刻が行われたことが知られる。

このほか、北宋では大観中（一一〇七～一〇）に『太平恵民和剤局方』五巻の初版本、大観二年（一一〇八）には『大観経史証類備急本草』三一巻、政和二年（一一一六）には『政和経史証類備用本草』三〇巻、政和中（一一一一～一八）には『聖済経』一〇巻そして『聖済総録』二〇〇巻が編纂され、刊行された。

南宋では相当量の編著書が成り、刊本となったが、これらについては本稿では割愛する。[26]

二、高麗の医書出版

高麗（九一八～一三九二）は開成に都し、九三六年に半島を統一、大いに盛えたが、一二六〇年、元の属国となり、以後元寇や倭寇のために疲弊・衰退した。

高麗の光宗（九五〇～九七五）は中国の科挙制を導入した。これによって秘書省（秘閣）に経史の典籍が整備され、やがて必要に迫られて典籍の刊刻事業が推進された。時は中国にさほど遅れをとることなく、靖宗期（一〇三五～四六）には本格化し、文宗期（一〇四七～八二）には経・史・子・集のあらゆる分野に及んだ。医書についても例外ではない。高麗のこの時期の出版物は中国刊本の覆刻ではなく、独自の校刊によるものであった。この点注目すべきである。

文宗十二年（一〇五六）九月、忠州の牧が医書七種を新彫し、版木が献上されて秘閣に収蔵された。[27] 次の七種である。

①『黄帝八十一難経』、②『川玉集』、③『傷寒論』、④『本草括要』、⑤『小児巣氏病源』、⑥『小児薬証病源一十八論』、⑦『張仲卿五蔵論』。

そしてそれらは「九十九板」であったという。

さらにその半年後の文宗十三年（一〇五九）二月には安西都護府使都官の員外郎・異善貞らが次の新彫書の版木を進上した。

⑧『肘後方』七十三板、⑨『疑獄集』一十板、⑩『川玉集』一十板。

また同時に知京山府事殿中内給事・李成美が新彫の⑪『隋書』六百八十板を進上し、これらは秘閣に詔置された。[28]

以上の版木・印本の現物はいうまでもなく一点も伝存していない。ただ、一〇五八～九年といえば治平熙寧の校刊に先立つ時期であり、高麗で中国に先んじてこのような医書類が刊行されたことは瞠目に値する。よって以下これらについて若干の試論を行い、識者の批判を仰ぎたい。[29]

『板』とは板木のことである。では「一板」には幾葉（丁）分が刻されていたのであろうか。片面のみに一葉か、あるいは両面に二葉分か、それとも片面二葉で両面四葉か。いずれのケースもありうるが、朝鮮古版木の遺品例や、状況からして、結論から述べると、この場合、通例のごとく片面一葉宛、両面で計二葉が彫られていたと推定される。それは『隋書』に六八〇板を要したこと、『肘後方』に七三板を要したことなどから推測される。そして、毎半葉八～一〇行、行一六～一八字といった大字本ではなく、毎半葉一二行、行二二～二三字程度の小字本だったようである。[30]

文宗十二年の忠州版は総計一九八葉ということになるから、小字本だったとしても各書の分量は少なかったろう。かりに一九八葉を七書で割ると、一書あたり二八葉強となる。これはふつう一巻（一冊）の相当量である。

①の『難経』は『集注』本ではなく、経文だけではなかったか。とすればいま試算するに二七葉余り（一四板）で済む。

まさに平均量である。

②の『川玉集』は、⑩と同じであろうから二〇葉（一〇板）。平均量より少ない。

③の『傷寒論』の版行が事実だとすれば、高麗はその嚆矢を放ったことになる。その『傷寒論』とはいかなる書か。今のいわゆる『宋版傷寒論』の内容を含むとすれば、少なくとも一四〇葉（七〇板）くらいは必要であろう。[31] しかし九九板のうちに七割を『傷寒論』に充てたとは考えられない。かりに太陽病篇から陰陽易差後労復病篇のみとしても七四葉（三七板）程度はある。これでも多すぎる感がある。三陽三陰病篇のみのテキストであった可能性が高いであろう。

④の『本草括要』は不詳。三木[29]は『宋史』芸文志の「張先懿本草括要詩三巻」を想定するが確証はない。三巻では多すぎるか。

⑤の『小児巣氏病源』は巣元方『諸病源候論』の小児部分（巻四五～五〇）の単行であろう。いま南宋版[32]をもって算出すれば四七葉（二四板）であり、これもやや多すぎる感がある。

⑥の『小児薬証病源一十八論』とはいかなる書であるか、よくわからない。銭乙の『小児薬証直訣』は少なくとも元豊年間（一〇七八～八五）以降の成立であり、陳文仲の『小児病源論』は南宋の成立であるから、両書ともに関係ない。三木[29]は『崇文総目』の「小児薬証一巻劉景裕撰」を想定する。あるいは『小児薬証』『病源一十八論』と分けて読むべきか。

⑦の『張仲卿五蔵論』は『張仲景五蔵論』一巻のことであろう。敦煌本、張元素序本など数種の伝本があるが、いま敦煌P二一一五を例にとれば一〇八行であるから、これは四～五葉（二～三板）の薄冊であったろう。

以上のごとくかりに、①一四板、②一〇板、③三七板、⑤二四板、⑦二板であったとすると、計八七板。とすれば④と⑥で一二板分ということになる。以上はあくまで乱暴な目算であるが、ともかくこれら高麗版は分量的に僅少なことを条件に選定されたことは疑いない。以後、高麗では高宗十三年（一二六六）に『新集御医撮要方』が刊本された以外、

医書の刊行記録はない。しかし、当時高麗では中国から将来した宋版によって次々とその覆刻が進められていったらしい。蘇軾はこれを危惧して高麗に対する書籍輸出の禁止を建言したほどであった。[33]

三、平安時代における中国医書の受容

日宋交流

遣唐使は承和五年（八三八）を最後に中断。寛平六年（八九四）に遣唐大使に任命された菅原道真はその停止を進言し、承認されて、遣唐使の時代は終りを告げた。廃止理由の一つは、あえて厖大な費用を用い危険を冒して、陰りのさした中国から学ぶ意識が薄れたからにほかならない。案の定、まもなく唐は滅び、紛々たる五代の世となる。

北宋は九六〇年に建国した。日本と宋との関係について木宮泰彦は次のようなことを述べている。[34]

「北宋は日本の藤原氏全盛の時代であり、南宋は日本の武士の興隆期である。北宋時代は日本は中国に対して消極的で私的な海外渡航は禁止し、宋船の往来のみに限られていた。ところが南宋になると進歩的であった日本武士（平清盛など）は大いに海外貿易を奨励したので、日本商船も少からず渡宋した。また文化面でも著しい相違があった。北宋は唐末五代の文化衰退の復興に努めた時期で、一方日本は藤原文化の最盛期であり、文化的にはほぼ対等であった。ところが南宋代になると中国は特有の宋文化を完成し、日本の武家はこの新文化を求め、吸収しようと努めた」。

いまその間の経緯を医学関係の事跡を中心として追ってみよう。

具平親王と寂照

正暦二年（九九一）具平親王が著した『弘決外典抄』は中国逸書を多く引用していることで知られる。医書では「太素経」「明堂経」「楊上善注」「楊玄操注」ほかからの引用があり、貴重な資料であるが、このような六朝～隋唐書の日中に

おける佚存状態は、五代を経て北宋に入った時点ですでに少なからず生じていたらしい。当時の入宋僧・寂照が長保五年（一〇〇三）渡宋の際日本から携えた『大乗止観』と『方等三昧行法』はもはや中国では佚書となっていて、天竺寺の遵式によって版行された。多分これが日中佚存書還流出版の最初の例ではなかろうか。高麗→中国還流よりもあるいは先んずるかも知れない。寂照は二度と帰朝することなく景祐元年（一〇三四）杭州で没したが、その間藤原道長ら日本の貴族・文人と文通を重ね、日宋文化の交流に寄与した。前述の具平親王もまた寛弘四年（一〇〇七）に書を在宋の寂照に送付している。[35]

宋は建国後、財政上、対外貿易振興を推進し、日本へは福建ついで浙江などの宋商人が来航するようになった。日本の窓口は博多で、鴻臚館で宋商人の接遇が行われ、大宰府庁がこれを管轄した。日本側は当初は消極的であったが、貿易の利を知って次第に積極的になっていった。

日朝交流

十世紀前半に朝鮮半島を統一した高麗は日本に修交を求め、日本も当初は対外貿易の対象を高麗に向けた。十一世紀後半に至って両国間には医学にまつわる次のような事件があった。

高麗文宗三十三年（一〇七九）十一月、文宗の治病のため、高麗は使者をして牒書を大宰府に致し、良医の派遣を求めた。大宰府では翌承暦四年（一〇八〇）三月五日、説明書付でこれを中央に送り、朝廷は八月七日頃披露して評議を開始。当時きっての名医・丹波雅忠（康頼の曽孫）の派遣は当然初めから見送られ、忠康もしくは俊通を派遣することに内定したが、反対意見が出たため、一転して摂政藤原師実が派遣中止を決定。来牒に礼を欠くことを拒絶の理由とし、大江匡房が返牒を草し、大宰府をして高麗へ送らしめた。[36] 中国側の史料（『続資治通鑑長編』）によれば、実は文宗の病は風痺（脳卒中麻痺）で、元豊元年（一〇七八）十月に罹患して宋朝に医を求め、翌十一月に宋朝から高麗に医官が派遣されている。[37]

日本への良医の要請は、宋医の治療が奏効しなかったことをうけてのことであった。永保三年（一〇八三）七月に至って文宗は没した。

以後、日本は十二世紀中頃まで、しばしば対馬・壱岐・薩摩・筑前・大宰府などから倭船を発し、高麗との交易を継続した。このうちにはむろん薬材も少くなかった。

再び中国に目を向けよう。

十一世紀における医事交流

十一世紀には日宋間にさほど特記すべき医事交流の形跡はない。『医心方』（九九四）の半井本巻二十五に二方、『太平聖恵方』（九九二）からの引用文があるが、当該巻は十二世紀前半の写本で、この引用は後世の追記であることは疑いを容れない。[38] ただ十一世紀にも宋船によって薬材を含む宋の物産は時折伝えられていた。たとえば、長元元年（一〇二八）九月、福州の宋商・周文裔が再来し、十二月十五日書を右大臣藤原実資に呈して方物を献じた。その中には、麝香・丁香・沈香・熏陸香・訶黎勒・朱砂などもあった（『小右記』）。治暦二年（一〇六六）五月一日には宋商の王満が来朝して、霊薬や鸚鵡を献じている（『百錬抄』『扶桑略記』）。

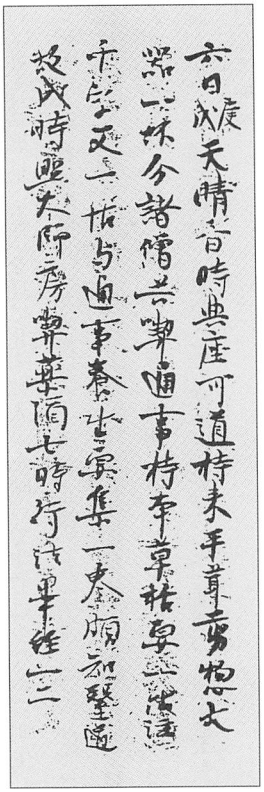

図1 『参天台五台山記』（東福寺本）巻6 熙寧6年1月6日条

前述の寂照に次いで延久四年（一〇七二）入宋した成尋は日宋の文化交流に多大な貢献をなした。成尋は熙寧六年一月六日、汴京において通事の携来するところの『本草括要』一帖、『注千字文』一帖を披見した（『参天台五台山記』巻六）（図1）。注目すべきは『本草括要』一帖である。これはあるいは前述の高麗版『本草括要』（一〇五八刊）かもしくはそれに基づく写本ではなかったか。だとすれば、これは日本人が印刷（由来）医書を目睹した初記録ということになる。ただし、当時すでに治平熙寧の医書校刊は終わっていたから、宋都で日本人が宋刊医書を一瞥したとしても、さほど奇とすべきことではなかろう。成尋は通事が医道によく通じていることに対し、自ら所持する『養生要集』一巻を通事に与えている。[39]

対南宋貿易の開始と『太平御覧』

宋王朝は建元元年（一一二七）、金軍の侵入を受けて南渡を余儀なくされ、臨安（杭州）に遷都した。これより祥興二年（一二七九）まで中国南半分は南宋時代となる。

十二世紀後半になると日本と南宋との直接交易が本格的に開けた。日宋貿易と称されるのがこれで、日本と中国の商船がそれぞれ博多港と浙江明州の寧波港を往来した。当時日本の支配者は平清盛であった。清盛は弟の頼盛を大宰府に派遣して府庁機構を統轄した。商船は門司関・赤馬関を抜け、瀬戸内海を通って大輪田泊（福原泊・神戸）まで行きかうようになり、対宋貿易は活況を呈し、平氏は財と文化を獲得した。日本人が印刷化された典籍（外典。印刷仏典の将来は十世紀以前に溯るであろう）を初めて目にしたのはこの時点かと思われる。摺本と称された宋刊本は中国の最新文化知識の象徴として珍重され、貴族や文人の学界に衝撃を与えた。

藤原頼長は康治二年（一一四三）に医薬記事を含む類書『太平御覧』一千巻を入手し、一三八巻目まで読み進めた。[40]これがはっきりした宋刊漢籍渡来の初記録らしい。『太平御覧』は太平興国八年（九八三）に完成し版行された書であるが、

頼長が見たのが北宋初刊本であったか否かは明らかでない。現伝の『太平御覧』は、宮内庁書陵部蔵（金沢文庫旧蔵）の慶元五年（一一九九）建寧刊本と、その校改本である東福寺蔵（弁円将来品）の川蜀刊本であるが、時代からして少くともこれらの刊本によったものでないことは明らかである。治承三年（一一七九）大輪田泊に入港した宋船も摺本『太平御覧』を舶載した。これは欠本で三百数十巻分しかなかったが、平清盛はただちにこれを買い上げ、急ぎ写本を作らせ、写本は手もとに置き、摺本を娘徳子の生んだ高倉天皇に献上した。[41] 当時の宋版に対する珍重ぶりを伝える記録である。

『通憲入道蔵書目録』

藤原頼長より十六歳年長で当時きっての博覧秀才であった藤原通憲は大の蔵書家でもあり、その蔵書目録に『通憲入道蔵書目録』がある。同書の成立年や各書の収蔵期は明らかでなく、没年の平治元年（一一五九）以前ということしかいえないのが残念であるが、同書著録の医薬書類において宋刊本由来とみられるものに「大観本草目録一帖」「大観証類本草十弓」[42]「同中帙十弓」「大観本草下帙十二弓」がある。ただし「弓」とは巻子装のことらしく、摺本とも明記していないから、[43] これは巻子写本であろう。『大観経史証類備急本草』（一一〇八）からの転写本であろうが、おそらく原刊本は日本に渡来していて、それから鈔写されたものと思われる。よってこれは宋刊医薬書渡来を示す最初の記録といえよう。

『薬種抄』などの香薬辞書

ほとんど同時期、亮阿闍梨兼意（一〇七二～?）は『香字抄（薬字抄）』『薬種抄』『香要抄』『香薬抄』『穀類抄』など一連の書を著した（保元元年・一一五六以前）。これらは天台・真言系の修法用香薬類の辞書で、一種の本草書である。森鹿三によれば、その作成にあたって用いられた底本は、元祐七年（一〇九二）序の陳承『重広補注神農本草并図経』二三巻と、『修文殿御覧』三六〇巻であるという。[44]『重広補注神農本草并図経』は宋刊本に由来するかとも思われるが、ともあ

れ、『大観本草』の一前身である。『修文殿御覧』も現伝しないが、同書は北斉の書で、写本にて早くに日本に渡来し[『秘府略』（八三一）はこれに拠る。また『日本国見在書目録』（八九五頃）や『弘決外典抄』（九九一）に著録]、『芸文類聚』などとともに活用された類書で、『太平御覧』の前身である。兼意は僧侶で頼長・通憲とは地位的には比較にならぬであろうから、新渡来書の伝達入手が遅れたとみるのが妥当かも知れないが、それでも『重広補注本草并図経』の渡来が『大観本草』のそれを溯る可能性は高いと考えられる。

『長生療養方』『座右抄』『吉日抄』

医書としては、平安最末期の寿永三年（一一八四）、釈蓮基の著した『長生療養方』に『証類（大観か）本草』からと思しき引用がある。あるいはそれを溯る承安元年（一一七一）成の『座右抄』（尊経閣文庫所蔵）には「八素経」「黄帝明堂薬術」「黄帝蝦蟇経」「針灸蝦蟇経」など旧鈔本からの引用と並んで、「新彫諸家明堂灸経」という版本と思われる書からの引用がある。また同時代から若干それに遅れるかと察せられる『吉日抄』（同文庫所蔵）なる古巻子本には「太素」「黄帝明堂薬術」「玉匱針経」「耆婆脈決経」「黄帝蝦蟇経」「針灸蝦蟇経」などと並んで、「銅人輸穴」からの引用がある。これは前述の天聖五年刊『銅人腧穴針灸図経』に由来するものであろう。これらが宋版医書を引用する日本医書の先駆である。

四、鎌倉～南北朝時代における中国医書の受容

建久三年（一一九二）源頼朝が鎌倉に幕府を開いてからはますます日宋船舶の往来は頻繁となり、陸続と宋版（南宋刊）医薬書が輸入されるようになった。この源氏・北条の武士の時代にはいわゆる武家文化の独自性が顕著となってくるが、これは宋文物の強い影響を受けたものである。医学の新しい担い手は、従来の丹波・和気氏らの世襲するところの宮廷医から、新渡来の禅宗による漢学を受容した学僧、とりわけ高度な医学知識を吸収し、それに長けた僧医へと移行して

いった。鎌倉から室町時代における中国医学の受容は、禅僧の活躍ぬきに語ることはできない。それは江戸時代初期、藤原惺窩によって儒学が禅宗から解放されたといわれるまで、すなわち曲直瀬道三の時代まで歴々かつ脈々と続いた。以下、鎌倉〜南北朝期におけるトピックスを徴することとしよう。

栄西

茶は薬物として渡来した。その嚆矢は最澄とされるが、明庵栄西に至っては『喫茶養生記』（一二一一初稿、一二一四再編）を著し、前代までの丹薬思想に代わる新しい仙薬としての茶と桑の効用を説いた。この書は源実朝の要請に応えたものとされるが、そこに引用される典籍は『太平御覧』や『証類本草』に依拠するところが大である。

弁円

栄西に遅れること約五十年にして入宋した弁円（円爾）は、仁治二年（一二四一）帰国したが、その際、多数の書籍を携来した。このうちには宋版医書が少からず含まれ

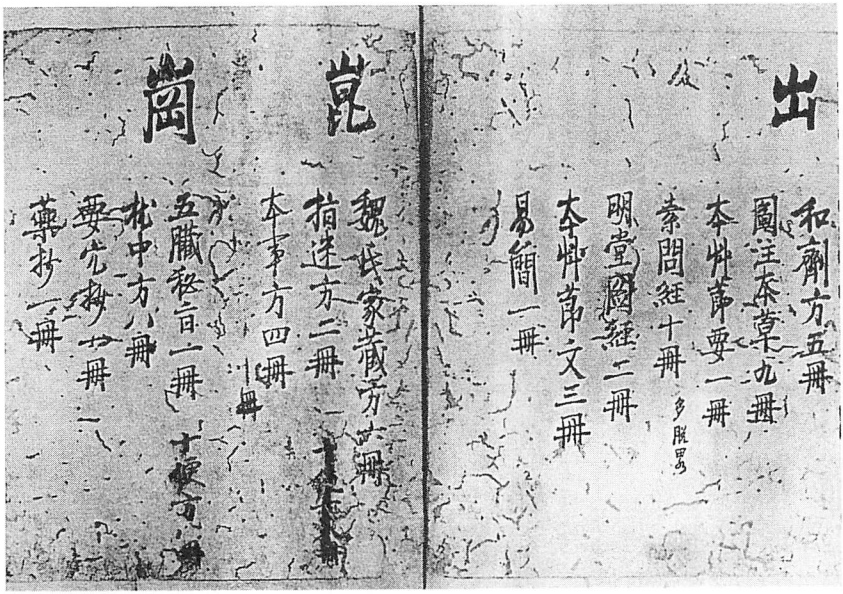

図2　『普門院蔵書目録』（東福寺本）医書の部分

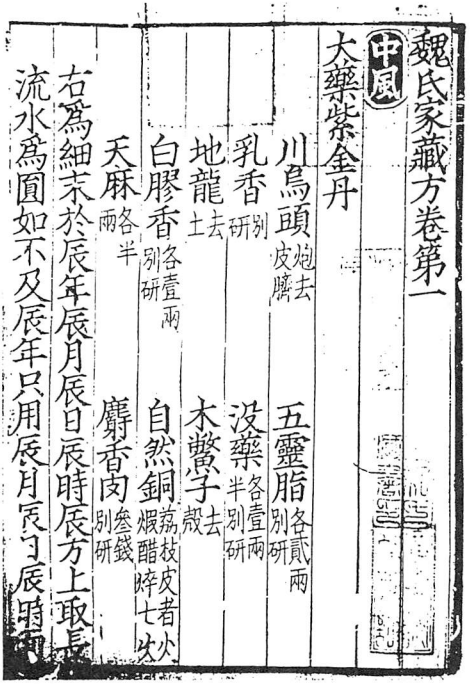
魏氏家藏方卷第一
中風
大藥紫金丹
川烏頭炮去皮臍　五靈脂各貳兩別研
乳香別研　没藥各壹兩半別研
地龍去土　木鼈子去殼
白膠香各壹兩別研　自然銅荔枝皮者少煅醋淬七次
天麻各半兩　麝香肉叁錢別研
右爲細末於辰年辰月辰日辰時辰方上取長
流水爲圓如不及辰年只用辰月辰日辰時

図3　弁円の将来した宋版『魏氏家蔵方』（宮内庁書陵部現蔵）巻首

ていた。『普門院蔵書目録』（図2）がそれを示す史料であるが、宮内庁書陵部所蔵の『魏氏家蔵方』一〇巻（図3）はその遺品の一つである。同書は南宋・魏峴の編著になる医方書で、宝慶三年（一二二七）の自序刊本。弁円は最新刊の医書をいち早く彼の地で購得し、持ち帰ったのである。この書は日中現存の唯一の祖本であり、弁円の所業なくしては今日に伝わり得なかったものである。弁円は帰国後、六十の齢を越え、往時を想い、この書の巻一末に正三位知家卿が作るところの歎齢既至六旬余歌の一首を自らの筆で書き付けている。さらに弁円将来書籍中には、前述のごとく慶元五年（一一九九）建寧刊本の校改本である『太平御覧』川蜀刊本がある。こういった大部の中国最新刊書を弁円は意欲的にわが国にもたらした。現在中国から出版され世上に流布する『太平御覧』の底本が弁円将来の東福寺所蔵本であることを一つ想っても、彼が今もっていかに日中文化交流に貢献しているか、いやがおうでも知れるというものである。前述の『普門院蔵書目録』は正しくは『普門院論章疏語録儒書等目録』といい、京都東福寺の塔頭、普門院の蔵書目録である。大道一以の編で、一以の自筆本が東福寺に現存し、そこに著録される書籍の多くは、東福寺の開山で普門院に止住した弁円が、宋から帰朝の際に将来したものであろうとされる。医書は総計二八種が載っており、なるほど宋版かそれに由来すると考えられる書が多い。次のごとくである。

「王氏本草単方十冊」「十便方八冊」「大観本草（又一部不具）」「局方一冊」「活人書二冊」「易簡方一冊」「王叔和脈訣一冊」「通真子脈訣一冊」「和剤方五冊」「図注本草九冊」「本草節要一冊」「素問経十冊（多脱略）」「明堂図経二冊」「本草節文三冊」「易簡一冊」「魏氏家蔵方六冊」「指迷方二冊」「本事方四冊」「五臓秘旨一冊」「枕中方八冊」「要穴抄一冊」「薬抄一冊」「明堂図一巻」「指迷方五冊」「消渇飲水方一冊」「家蔵秘方（散々）」「雑々方（破了）」「外境治方二」。

宋から元へ

伝来経緯は明らかではないが、金沢文庫伝来の宋版医書『諸病源候論』『備急千金要方』『外台秘要方』『太平聖恵方』『楊氏家蔵方』『図注本草』なども禅僧の往来あるいは日宋貿易によって舶載されたものに相違ない。

宋からの輸入品は薬物に関しては香薬類や鉱物薬が中心であった。このうち内服治療用のものはさほど多くはないであろう。一方、日本からは水銀・鹿茸・茯苓・真珠・硫黄・螺頭ほかが輸出された。

文永の役（一二七四）・弘安の役（一二八一）と二度にわたる元寇は日本を混乱と恐怖に落とし入れた。博多の街は焼土と化したが、いずれも台風によって救われたことは日本にとって幸いなことであった。両役の間、一二七九年に南宋は滅亡し、蒙古は元帝国となり、三百年にわたる日宋関係は終わった。

惟宗具俊と『本草色葉抄』『医談抄』

この頃、最も進歩的な医家に、宮廷医ではありながら、和丹とは一線を画した惟宗氏がいる。祖は讃岐国の帰化氏族で秦姓。元来、明法家であったが、医博士惟宗俊通の家系は数代にわたり多くの名医を輩出した。

その一人、惟宗具俊が宋の滅亡直後に著した書に『本草色葉抄』[45]全八巻がある。本書はかつて具俊が薬の異名に不暁なため自ら恥じたことを契機にその研鑽を一念発起し、弘安五年（一二八二）七月に起草、同七年（一二八四）に完稿と

なった文字どおりの本草いろは順引辞典である。基本的典拠はいうまでもなく当時新渡来の『証類（大観）本草』である。注目すべきは『傷寒論』からの直接引用と思しき字句が存在することである。すなわち、巻四礼部における連軺に対する注で、『傷寒論』を出典とし「連翹根也」と記す。『宋版傷寒論』には「連翹根是」とあり、『注解傷寒論』には「連翹根也」とある。「也」「是」「之」の草体は近いので転写の際の訛も皆無とはいえないが、この場合、成無己の『注解傷寒論』からの引用とみるが自然であろう。『注解傷寒論』はおそらく宋の元祐三年（一〇八八）刊の『傷寒論』に依って作られた注解書で、金の大定十二年（一一七二）初刊。本書は出版後大好評を博し、本書出現によって原宋版『傷寒論』はすっかり影を潜めてしまったほどである。日本初渡来の『傷寒論』が成無己注本だったことはむしろ頷けよう。現在のところこれが『傷寒論』渡来の上限史料である。[46] 具俊は『本草色葉抄』と前後して『医談抄』二巻を著しているが、同書にも『証類本草』ほか宋刊本医書からの影響がうかがえる。

惟宗時俊と『医家千字文注』『続添要穴集』

惟宗具俊にごく近い人物に惟宗時俊がいる。時俊は永仁元年（一二九三）、医道の要を初学者に示すべく周興嗣の『千字文』の体式を真似て『医家千字文注』一巻を著した。この書には引用典拠名が明記されており、当時用いられた医学テキストを知るうえで格好の資料である。引用文献名を挙げれば次のようである。[47]

「医説＊」「淮南子」「活人書＊」「漢書」「魏氏方＊」「王函方序」「外台秘要方△」「後漢書」「五行大義」「産育保慶方＊」[48]「三因方＊」「三国志」「史記」「周礼」「証類本草＊」「針灸経」「新修本草」「晋書」「聖恵方＊」「選奇方」「千金方」「千金翼方△」「荘子」「搜神記」「素問△」「素問新校正＊」「素問注＊」「孫真人養生銘」「存真図」「孫愐」「大清経」「太素経」「太平御覧＊」「太平広記」「帝範」「桐君録」「唐書」「泊宅編」「八十一難経」「病源論」「風土記」「抱朴子」「北斉書」「本草」「本草衍義＊」「本草抄義」「本草新注＊」「本事方＊」「脈経△」「明堂経」「養生要集」「梁典」「列子」「録験方」。

このうち＊印を付したのは確実に宋刊本に由来すると考えられる文献である（△印はその可能性の高いもの）。およそ三分の一が宋刊本由来の記事で占められていることがわかる。『医家千字文注』の成立期と当時の世情を勘案すれば、これらのうちには元版由来の文献は存在しないと推定される。

惟宗時俊はその後、正安元年（一二九九）に至って『続添要穴集』（静嘉堂文庫所蔵）という経穴学書を編纂した。もと全二巻一七八篇より成るが、現存部は上巻の巻首より第三十篇までである。巻首の時俊序によると、本書は旧伝の『要穴之抄』（撰者不詳。『普門院蔵書目録』著録の「要穴妙一冊」と同書か）に時俊が続添したものといい、本文では旧本『要穴之抄』の文章と続添の文章とが区別されている。『要穴之抄』部分には「耆婆針灸図」「秦承祖図」「九虚図」「明堂図」「明堂経」「明堂灸経」「耆婆方」など唐鈔巻子本に基づく書を引き、時俊の続添部には「聖恵方」「外台秘要方」「王惟一」「備急要方」「千金翼方」など宋刊本に基づく書が引用してある。これら惟宗氏の書は、この時期、最先端の医学界において、医学典範が旧鈔巻子本から新渡来宋刊本に転換したことを如実に示すものである。

梶原性全と『頓医抄』『万安方』

鎌倉時代最大の医学全書である梶原性全の『頓医抄』五〇巻（一三〇二～四）と『万安方』六二巻（一三一三～二七）もまた拠るところの資料は旧鈔巻子本系と新渡来宋刊本系の混交であるが、もはや後者の影響のほうが圧倒的に強い。

『頓医抄』の中心的資料となった『太平聖恵方』は南宋紹興十七年（一一四七）福建刊本が使われたらしい。また『万安方』の中心的資料となった『聖済総録』は元大徳四年（一三〇〇）刊本が使われている。この時点では『（宋版）傷寒論』もすでに伝来しており、『万安方』に引用される『傷寒論』は確実に林億刊本に由来するものである。そしてここでは元の著述を含む元刊医書が複数用いられていることは注目すべきである。たとえば『風科集験名方』は大徳十年（一三〇六）に版行された医書で、刊行後わずか数年にして日本の医書に引用された事実は、南宋が亡んだのちも、引き続き元と交

易が頻繁に行われていたことを物語るものである。『万安方』の引用する中国書については別稿を参照されたい。[49]

有林と『福田方』

ついで、南北朝時代を代表する医書に『福田方』十二巻（一三六三頃）がある。著者の有林は京都南禅寺に住したとも伝えられる禅僧であり、同書には漢より元に至る約一六〇種の文献が引用してあるが、過半は新渡来の宋元版に由来する医薬書である。[50] 最新医書では元の至正三年（一三四三）刊の『世医得効方』を引用しており、この時代も元からも新たな医書の輸入が続いたことを示している。

結　語

中国では北宋に至り、しばらく低迷した医学文化が再び隆興し、印刷技術の進展とあいまって数多くの医書が刊行されるようになった。それによって中国医界では刊本もしくはそれに基づく写本が主体となり、唐鈔に由来する旧巻子本はたちまち姿を消してしまった。一方、日本ではかつての遣唐使将来品に由来する古巻子本系の医書と、新渡来の宋元版系の医書が、半ば並存して行われた。従来多大な犠牲を払って憧れの唐から得、久しく学んできた医学典籍は容易に捨てがたい重みがあり、加えて宋からの新版も依然として手軽で廉価なものではなかった。旧来の唐医学と新渡来の宋元医学の共存、これが鎌倉～南北朝の日本医学の最大の特徴といえる。

平安後期、北宋の出版医書がただちに日本にもたらされ、強烈な影響を与えるということはなかった。本格的な導入は南宋版によってであり、それも鎌倉時代に入ってからのことである。当初それを担ったのは惟宗氏のような進歩的な宮廷医で、まもなく禅宗の僧医の手へと移っていった。禅宗は宗教の域を越え、学問・芸術すべてを包含し、宋元文化の機軸そのものであった。日本の渡海僧と来日中国僧らによってその文化は日本にもたらされ、浸透していった。やが

てその土壌は、遣唐使時代と並ぶ、華々しい日明の文化交流の時代を生み出すのである。

〔本稿は一九九七年九月十一日に米国オレゴン大学で開催された国際交流基金による国際学術会議"Tools of Culture : Japan's Technological, Medical and Intellectual Contacts in East Asia, 1100-1600."で口頭発表した研究の日本語原稿（未発表）の修訂稿である。同学術会議を主宰されたオレゴン大学日本中世史のアンドリュー・ゴーブル博士をはじめ同大学の関係者には深甚なる謝意を表する。今回の発表にあたっては、さらに東野治之大阪大学文学部教授の校閲を受け、斧正をいただいた。あわせて御礼申し上げる。〕

〈文献および注〉

（1）敦煌出のP二六七五は写本であるが、巻首に「新集備急灸経一巻京中李家於東市印」とあり、末尾に「咸通二年歳次辛巳十二月廿五日衙前通引並通事舎人范子盈、陰陽氾景詢二人写記」とある。字面どおりに解せば、咸通二年（八二一）に写されたこの原本は、長安の東市で印刷された李氏の家刻本ということになる。なお、『開元広済方』（七二三）が印刷出版されたとする説もあるが、これは大型の木製看板に墨書して路傍に建て、一般に筆写させたのであって、印刷出版ではない。

（2）この場合、「刊定」は訂正するという意で刊行（版刻）の意味はない。「鏤板」が版刻の意である。

（3）「源」の字は『玉海』は「隙」の字に作るが、「源」の訛であることは明らか。

（4）松木きか「北宋の医書校訂について」（『日本中国学会報』第四八集・一九九六）の表一では、『玉海』天聖校定内経素問の項により、『外台秘要方』が天聖五年四月に「令国子監督摹印頒行」されたとしているが、これは錯誤で、そのような事実は認められない。

（5）『宋史』巻十一・仁宗本紀にも「慶暦八年二月癸酉、頒慶暦善救方」とある。

（6）前注（4）の松木論文。

（7）岡西為人『宋以前医籍考』の当該書項より援引。

(8)『宋史』巻十二・仁宗本紀にも「皇祐三年五月乙亥、頒簡要済衆方、命州県長史、按方剤、以救民疾」とある。
(9) 前注(7)に同じ。
(10) 陳捷・小曽戸「北宋官刻医書の民間への流通」『日本医史学雑誌』四三巻三号（一九九七）。
(11) 拙著『中国医学古典と日本』（塙書房・一九九六）第三章第一節参照。
(12) 前注(11)に同じ。
(13) 前注(11)の第三章第二節参照。
(14) 前注(11)の第四章第五節参照。
(15) 前注(11)の第四章第六節参照。
(16) 前注(11)の第四章第一節参照。
(17) 前注(11)の第四章第七節参照。
(18) 前注(11)の第一章参照。
(19) 馬継興『中医文献学』（上海科学技術出版社・一九九〇）では治平四年の刊刻と断定する。高・孫・林の官職名からすれば治平四年という可能性もなくはないが、馬氏の断定する根拠は明らかではない。
(20) 前注(4)の松木論文。松木氏は、「臣億等〜」が嘉祐年間の校正注で、「新校正〜」が孫兆注ではないかと推定している。ちなみに『傷寒論』における宋臣注は「臣億等謹按……」となっている。なお、孫奇と孫兆は兄弟で、父は孫用和である（宋・邵博『河南邵氏聞見前録』巻二）。
(21) 前注(4)の松木論文では、『素問』の宋臣注に関して、「校正医書局が『霊枢』を引用して校定することはほとんどなく、当該部分を『甲乙経』で確認することが多いことと、孔穴についての記載をほとんど『甲乙経』に依っていることから同書への校正医書局の信頼をうかがい知ることが出来る」としているが、それは当時宋政府に『霊枢経』ないしは『針経』の完本が存在しなかったことに起因すると考えたほうが妥当であろう。岡西為人『中国医書本草考』一九七頁にも指摘されるごとく、『素問』調経論篇第六十二の新校正注に「按今素問注中引針経者多霊枢之文、但以霊枢今不全、故未

得尽知也」とある。今後それらの引用部分についての精検に期待したい。

(22)『高麗史』巻十、世家巻第十、宣宗辛未八年六月丙午条。

(23)『続資治通鑑長編』巻四百七十八。

(24)『宋朝事実類苑』巻三十一。

(25)友部和弘・小曽戸・真柳誠「『霊枢』の古版―『針経』の刊行事実」『日本東洋医学会誌』四〇巻四号（一九九〇）。

(26)拙稿「南宋代の医薬書（1）～(6)」『現代東洋医学』九巻一号～一〇巻二号（一九八八～八九）。

(27)『高麗史』巻八、世家巻第八。「文宗戊戌十二月九月己巳朔、忠州牧進新彫黄帝八十一難経・川玉集・傷寒論・本草括要・小児巣氏病源・小児薬証病源一十八論・張仲卿五蔵論九十九枚、詔置秘閣」。

(28)前注(27)の同巻。「文宗己亥十三年二月甲戌、安西都護府使都官員外郎異善等進新雕肘後方七十三板・疑獄集一十板・川玉集一十板。知京山府事殿中内給事李成美進新雕隋書六百八十板、詔置秘閣」。

(29)三木栄『朝鮮医書誌』（一九七三）一六五～一六八頁でも、これら高麗版医書について言及されている。

(30)『隋書』は和刻本（毎半葉一〇行、行二一字）では目録を含め一七八四葉を要している。当該高麗版は六八〇版（一三六〇葉）というから、毎半葉の字詰をこの程度に見積ればうまく見合うではないか。また、『肘後方』は当該高麗版では七三板（一四六葉）という。現伝の万暦劉自化本は目録四葉、本文二七九葉、このうちには金の楊用道の附方が都合八二葉分あるからこれを差し引くと本文一九七葉である。『隋書』と同じく毎半葉の字詰をこの程度に見積もれば合点がゆく。三木は前注(29)で「七種の医書の板数がすべてで九九板とは理解に苦しむ。しかしてこれはおそらく板木が長大型で一板に表二葉・裏二葉に相当する版型が剞劂されていたものと思われる。後来の知見に待つ。（付記、『疑獄集』は李朝初期刊本が現存する。これは紙数四〇丁である。文宗己亥板は一十一板（ママ）とあり、ほぼ一致する。）」という。その可能性も否定できないが、『隋書』六八〇板の場合では二七二〇葉となり、相当な大字版でないとこれほどの葉数は費せない。

(31)いま寛文八年刊の岡嶋玄提本を試算の資料とした。

(32)宮内庁書陵部所蔵。これはかなり詰まっていて毎半葉一四行、行二三字である。

(33)『蘇東坡全集』、東坡奏議巻十三。
(34) 木宮泰彦『日華文化交流史』(冨山房・一九五五)、二五四頁。
(35)『国史大辞典』(吉川弘文館・一九八六) 寂照の項による。
(36) これは『水左記』を主要典拠とする。山崎佐「高麗の需めたる医師派遣拒絶の真相(上)(下)」『中外医事新報』一二五五・一二五六号(一九三八)。
(37) 森克己『日宋貿易の研究』(国立書院・一九四八)、二八四〜二八五頁。
(38) 森立之も『枳園叢考』で同様に結論している。ただ、現伝『太平聖恵方』(南宋版)と、『医心方』の所引文には字句に異同があることから、森立之は本引用文は北宋版に拠ったものと推定している。しかし北宋版渡来の可能性は、他の宋版本の渡来状況からしてもさほど高くないように思われる。
(39) 原文には「与通事養生要集一巻、頗知医道故」とある。『医心方』や『和名類聚抄』に引く「養生(性)要集」はおそらく張湛の『養生要集』十巻であろうから、同一書ではない可能性が高い。
(40)『台記』康治二年九月二十九日条。
(41) 中山忠親『山槐記』治承三年十二月十六日条。
(42)「弓」の字は、楊慎の『転注古音略』に「巻帙之巻」とある。『通憲入道蔵書目録』においては、「巻」は巻次第(巻次と巻子数が同じ場合も)、「弓」とは巻子数、「帖」とは冊子数、「帙」とは巻子複数を包む廉子、「結」とは巻子複数を縛る紐をいうらしい。
(43) たとえば「詩義音弁五帖摺本」とあるのは明らかに宋刊本であろう。
(44) 森鹿三「香薬抄・薬種抄解題」『天理図書館善本叢書』(八木書店・一九七七)。
(45) 国立公文書館内閣文庫に室町写の祖本が唯一伝存。同文庫からの影印本(一九六八)がある。
(46) 真柳誠・小曽戸洋「日本における『傷寒論』の渡来期について」『日本東洋医学会誌』四〇巻四号(一九九〇)。ただし同発表では「也」を「是」に誤読した。

(47) 篠原孝市・榛葉静江「『医家千字文註』所引書名人名索引」『東洋医学善本叢書』第八冊・解題研究索引（東洋医学研究会・一九八一）。

(48) 正しくは「産育宝慶集」であろう。

(49) 郭秀梅・小曽戸洋・岡田研吉「中国医書対『万安方』的影響」『中医薬雑誌』九巻三号（一九九八）。

(50) 拙稿「『福田方』組成文献の解析」『日本医史学雑誌』三三巻一号（一九八七）。なお、『福田方』と著者有林に関しては近年、佐々木利和「博物館書目誌稿・帝室本之部・医学館本篇―『有林福田方』について（上）（下）」『MUSEUM』・五一八号（一九九四）・五三三号（一九九五）の興味深い論考がある。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）

From Scroll Copy to Song-Yuan Books : Aspects of the Reception of Chinese Medical Works in Medieval Japan

by Hiroshi KOSOTO

Since "Ishimpo" was completed in 984, Japanese medicine reached its worst stagnation period for about a century. What reactivated Japanese medicine was the printing culture in China, which began to flourish in the Northern Song. However, Japan was relatively distant form China, since the former had stopped sending envoys to the latter in 894, in the late Tang dynasty. Thus, the Northern Song printing culture did not immediately have a drastic impact on Japan. Japan and the Song became close in the twelfth century and became even closer during the Kamakura period. However, in medieval Japan, both handwritten scroll copies of medical works and printed Song-Yuan books were in use for a long time. This was because the Japanese had made lot of sacrifices when the envoys obtained the scrolls from Tang China and they had become attached to them, and also because the books were not inexpensive. Therefore, even till the Muromachi period, both Tang medicine and Song-Yuan medicine coexisted in Japan. This is the most important characteristic of medieval Japanese medicine. In China, on the contrary, scroll copies disappeared immediately once medical books began to be printed.

Palace doctors such as those from the Koremune family first introduced new medicine from the Song to Japan, but soon *Zen* Buddhist monks took over their role. *Zen* Buddhism went beyond the boundaries of religion, encompassing all the arts and learning. It was at the the center of the Song-Yuan culture

and it shaped the Japanese sword class culture. The Song-Yuan culture, introduced by Japanese and Chinese monks, gradually took roots in Japan, and later resulted in the new era of Japan-Ming cultural exchange, comparable to the era of Japanese envoys to Tang China.